

日之出村妖怪奇譚

一月も下旬、秋を彩っていた葉々もすっかり落ち、ここ日之出村ひのいでもいよいよ冬の景色になってきた。日を追うごとに気温も下がり、標高が一〇〇〇mも超えると、さすがに朝晩は寒さに磨みがきがかかってくる。

夕暮れ。

木々がざわざわとざわめく頃、村はずれにある瀟洒しょうしやな建物に郵便物が届いた。村で唯一、正式に日本郵便に登録されている建物である。

「ごくろうさまー！」

郵便を受け取ったこの瀟洒な建物の住人、陸りくはカブで走り去る郵便局員の背中に、そう声をかけた。

日之出村へは県道からさらに林道に入り込んで延々と山道を登って来なければならない。切手一枚で郵送するには赤字過ぎる場所である。

陸は郵便屋さんが見えなくなるのを確認すると、受け取った郵便の差し出し人と宛名を確認した。宛名はもちろん自分宛である。日之出村の全ての郵便物は陸の住むこの別荘にしか届けることは出来ないのだから。

が、視線を追っていくと、冷泉れいぜい方彩様あやと書かれている。

どうやら日之出神社の土地神であるところの彩宛しおさきのようだ。

差し出し人は長野県汐碕しおさき市市役所戸籍課。

「凜^{りん}関係の書類かなー。書留だったからきつと重要な書類かも」

この村で雑貨屋を営んでいた猫又の凜は、今、汐碇市で店を開いている。

「ウフフ……」

陸は神様宛に郵便物が届くことが、少しおかしくてつい声が漏れてしまった。

神様には祈ったりして思いを伝えたりすることはあるけれど、こうして実際に郵便物を介して伝えるのはなんだか不思議な感じがする。

あ、でも願い事を書く短冊や、厄払いのおみくじなんかは似てるかも、と思う。

「夕奈^{ゆうな}、彩先生に郵便来たから届けてくるね」

陸は別荘へ振り返ると、中にいる同居人に声をかけた。

「はーい」という声が別荘の方から聞こえてくるのを確認して、陸は歩き始めた。

日之出神社は別荘からそう離れてはいないが、神社へは一〇〇段以上の階段を上らなければならない。陸は何度も上り下りしているが、やはりこれだけの段数となるとさすがに最後は息も荒くなってくる。

神社は針葉樹に囲まれているので、夕暮れともなるとずいぶん暗かった。

立派な杉林が階段を上ってきた陸を出迎える。

夏はこの杉が作り出す日陰が涼しさを誘ってくれるが、冬はただ不気味なだけであった。

「彩せんせー?」

陸はちよつとか細い声で彩を呼ぶ……が、特に反応はない。

すると、向こうから何やら薄ぼんやりとした露もやのようなものが浮かび上がったかと思うと、ふわりふわりと浮かびながらこっちに向かってくる。

「わわっ！」

心細かった陸は思わず声を上げてしまうが、そもそもここは妖怪の村である。幽霊や物の怪が出て当たり前場所に、わわつとか驚く必要もないはず。

なのだが……。

「やっぱり、怖いものはこわいなー……」

などと心で思いながらも、心を強くして拝はいてん殿へ向かった。

「ばあ!!!」

突然白いもやが破裂したかと思うと、中からこれまた真っ白で小さなキツネが姿を現した。

「うおお！」

同時に陸がビックリして仰のげ反る。

「わはははは、びびってやんの」

キツネが高笑いをすると、嬉しそうにくるっと宙を一回転した。

彩の使役する管狐くだきつねである。

「あー、もう、辰巳たつみか、脅かさないでよ」

「フーか、陸、何回同じ手でビビってんだよ！」

「そんなの数えたことない」

「いい加減、こんなことぐらいで驚くなつて」

何度も同じようなドツキリをしている辰巳は、実は少し退屈気味だった。他にもいろんなドツキリを試したいのに、いつも一番単純なので陸は驚いてしまうので、つまらないのである。

「えーと、彩先生はいるかな…？」

バクバクする心臓をおさえながら陸は用件を伝える。

「お、いるいる。なんか冬になってから何もしねーで酒ばっかり飲んでてよー。ありゃあニートだなニート！」

「あんまり悪口言っていると、またひどい目に遭うよ？」

と、陸が言い終わらないうちに、辰巳の身体があらぬ方向に飛んでったかと思うと……。

「ふぎやー！！」

巨大な杉の幹に激突していた。

「ほら、言わんこっちゃない……」

「うるへー！！」

打ち付けた鼻を押さえながらも辰巳はどこかに飛んで行ってしまった。

「彩せんせー」

拝殿を通り過ぎて、その隣にある社務所の引き戸を開けると、首を突っ込んで彩の名を呼ぶ。まー、社務所の扉を開けたとたんに酒臭い。

とはいえ、いつものことである。

「もー……」

陸は呆れながらも中に入ると、居間で大の字に寝ている彩をすぐに見つけた。

「えーと」

こんな状況はすでに慣れたもので、陸は両手で彩のあごの下から首の後ろにかけての部分を優しく撫でてあげた。

「あん……ん……んあ……んん……はあん……」

色っぽい声が出たかと思うと、彩はその陸の腕にすりすり耳の部分をこすりつけてきた。

彩の毛はフワフワでとても柔らかい。撫でているこっちが気持ちよくなるくらいだ。

実は陸が撫でた部分はキツネにとって気持ちのいい場所らしい。酔い潰れていて彩を何度も起こしているうちに、気持ちいいポイント且つ彩が機嫌を損ねずに目を覚ます場所だというのに陸は気づいたのだ。

「はっ！」

陸にすりすりしていた彩が急に我に返ると、ぱちりと目を覚まして、すざっと後ずさった。

その素早い行動も、実に獣らしい。

「あ、おはようございます、彩先生」

にっこりと陸が笑顔を彩にむける。

「陸か……もー、なによ、心地よく酔い潰れてたのに……」

彩はすぐにトロンとした目つきになると、ふあーっと欠伸あくび一つ。乱れた巫女装束の掛衿かけえりから乳房がこぼれそうになる。

それから口の周りのよだれを裾すそでふいた。

まるで子供ようだ。

こんなんでも紀元前から生きているというのだから、見た目では解らないものである。

「彩先生宛に郵便が来てたから、届けに来たんだ」

陸は彩が落ち着くのを待って、持っていた封筒を胡座あくらをかいている彩の前にすつと差し出した。

彩はそれを受け取ると、裏を見て「あー」とか短い声を発した。どうやら来る予定のものだったらしい。

「ありがと。あとで見とくわ」

そう言うときまたパタリと畳の上に大の字になってしまった。

「もー、なくさないでくださいよ？」

陸は呆れながらも、これ以上何を言ってもダメなのは解っているので社務所をあとにした。

念のため、郵便を届けたことを他の者にも伝えようと思いつく。あとになってそんなもんあつ

たっけとか、なくしたーとか言うことがあるからだ。ここまで信用されていない神様もなんだかな
感じである。

だが参道には先ほどの管狐の姿はなかった。

「困ったなあ……」

と思って見上げると、ひときわ大きな杉の木のでっぺんに白いものが見つけた。

背筋をピンと伸ばして、どこか遠くを眺めている妖怪である。おそらく天気予報のために空気の
流れを読んでいるのだと思われる。

「あ、紗雪ー！」

それが雪ん子の紗雪であることが解ると、陸は手を大きく振った。

「……………」

すると無言ですーっと木から下りてくる。

「なに？」

地面に降り立つと、相変わらずの抑揚のない声でぼそり。

「彩先生に郵便物を渡したんだけど、そのことを伝えておこうかと思って」

「コク」

「あとでなくしたとか言われないうちに」

「わかった、憶えとく」

これで一安心だ。

「ありがとう。じゃあ、ボクは戻るね」

「コク、お疲れさま」

紗雪に見送られて陸は別荘へと戻っていった。

* * *

翌朝、彩は眠い目を擦りながらも目を覚ました。

目を覚ますもクソも、本来、神である彩に睡眠は不要である。酒を飲んだあと眠るのが心地よいというただそれだけの理由で、彩は寝ているのである。

「おはようございます、彩先生、朝食の準備が……あ……」

朝食を呼びに来た紗雪が、彩の姿をみて、言葉を止めた。

「おはよ、今日の朝食は何？」

一方の彩はいつも通りの反応。

いつもと違うのは、その服装だった。

普段は巫女装束である彩が、人間が着るカジュアルな服を身につけていたのだ。コットンのレースにニットのカーディガン、下は冬らしいモノトーンのチノパン。ちょっとしたＯＬとかそん

な感じの印象を受ける。

もちろん尻尾と耳は隠してある。じゃないとそもそも人間の服は着られない。

「どこかいくの？」

表情をあまり変えない紗雪が、珍しく目を見開いた。

「町役場に用事が出来たのよ。巫女姿で行くのもどうかと思って……変じゃない？」

「都会っばい」

「そ、ならいいわ」

彩は膳が用意されている居間へ。

朝食といってもそもそも妖怪は調理をしない。かつてはお供えされたもの（五穀）がメインだった。もっと時代を遡れば、それこそ妖怪であるから人間も食卓に上ったものだったが、日之出村には陸という調理人がいるせいでおおよそそういった人間から野蠻に見えるものが食卓に上ることはなくなった。

陸が紗雪に料理を教えたため、紗雪がこの村にいる間、彩は紗雪の料理にありつけるのである。神が飯を食うのかという根本的な問題があるのだが、これも睡眠と同じである。食は楽しいので食う。彩からすればただそれだけのことである。

「おー、鮭と納豆」

今朝は日本の朝ご飯といった感じである。

彩は味噌汁をすすりながら、一枚の紙を紗雪によこした。

「あ……」

それは汐碕市役所から届いた冷泉天音あまねの死亡診断書だった。

賢者に関する殺人は闇に伏されることが多い。様々な政治力が働いて隠蔽される。事件が世間に明るみ出ることはないし、遺族には事故死や病死が告げられる。

診断書に書かれてある天音の死因は多臓器不全だった。交通事故でダメージを受けた臓器の回復は難しく、最終的に腎不全と免疫力低下が原因と思われる敗血症による臓器障害のためと説明された。後見人には彩の名前が書かれている。発行は汐碕総合病院となっている。

「役場に死亡届を出してくるわ。あの子に遺産とか銀行口座とかは特に無いと思うけど……」
確か死亡して七日以内に出さないといけないはずだ。

人間の決めたことであるから、この辺は従わないといけない。

汐碕市の市長でもあり賢者でもあるルイーゼが気を利かせてくれたのか、死亡日時は昨日と言うことになっている。ついでにルイーゼからも一筆入っていた。連絡先を見つけるのが大変だった、遅くなっても文句を言う的なことが書かれている。

「市長だから何かと融通は効かせてくれたいたいね」

市長からの手紙を見ながら、彩は笑った。

「……」

紗雪はなんともうまく感情を制御できないでいた。天音が亡くならなければならなかった理由は理解はしているけれども、理不尽であったし、やりきれない思いと悲しみがどっと心の中を襲ったのだ。

今、別荘に行っても、天音の姿はない。

これから先にも永遠にないのだと思うと、余計に悲しい思いが重く心の中を支配していく。ただ助かったとしても、どうなっていただろうかという疑問はある。

助かっていたら、天音は幸せに生きられたのだろうか？

よく解らない。

「なにそんなに見つめてんのよ」

考え事をしていたのに、彩からは死亡診断書を見つめているように見えたらしい。

「あの時のことを……少し思い出してみましただけ……」

紗雪はそう答えるとそそくさと診断書を折りたたんで、元の封筒にしまった。

涙が出てくるということはなかった。

ただ悲しいというか、切ないというか、空しいというか、悔しいというか……そういった負の感情がふつつつと心の中で渦巻いていることは確かだった。

「忘れるのが一番よ。時間は、忘却を与えてくれる」

「天音のことを？」

「天音まで忘れられるならそれに越したことはないけど……さすがにそうはいかないでしょ？」

「コク……」

忘れたら天音が可哀想だと紗雪は思った。

「でも悲しい思いは時間と共に薄れるわ。あの子との楽しい記憶だけが美化されて残る。時間とはそういうもの。だから安心しなさい」

「コク」

神がそう言うのだから、それを素直に受け取ろうと紗雪は思った。

「ふー、ご馳走様」

紗雪があれこれと思い巡らしている間に、彩は朝食を終えた。そして、例の封筒を手取る。

時間はもう九時を過ぎていたので、役場は開いているはずだ。

「じゃ、行ってくるわね」

「はい、行ってらっしゃい……」

爪楊枝つまようじを一本つまむと、彩の姿が消えた。

紗雪の目の前に残されたのは空になったお膳のみ。

天音のことを思い出していた紗雪は、一人取り残されたような気分になって、余計に寂しさが増してしまった。

* * *

日之出村から一番近いバス停は野反湖のぞりこという場所である。しかしこのバス停は冬期は運行されない。となると次の最寄りバス停はさらに南に下った花敷温泉はなしきと言う所になる。

彩は花敷温泉に降り立つと、バス停の時刻表をマジマジと見つめた。

「なーにー？ 九時五二分々?? まだ三〇分も先じゃない!!」

町役場に直接行かないのは、人目のあるところいきなり湧いて出たら怪しまれるだろうというただそれだけの判断である。

三〇分ぐらいどうってことはないのだが……。

「……………」

見渡してもベンチはない。ポツンとバス停のポールだけが立っている。

後ろは郵便局だ。

仕方がないのでぼけーっと待つ。

時折人や車が通るのを見て、さすが田舎とはいえ日之出村とは違うわねとか思う。

そして通って行く人が皆、奇異きいな目で彩を見る。

当たり前である。

どう見ても登山者にも旅行者にも見えない服装、しかも荷物も何も持ってない。手ぶらである。

派手な二〇代前半とおぼしき女が、一日数えるほどしか来ないバス停でぼけーっと突っ立っているのである。しかも爪楊枝を咥えて。

それだけで田舎では充分事件だろう。

かといって自殺者にも見えない。

すると近くを通りかかったお年寄りが一人、彩の前まで来ると、しばし両手を合わせて行った。
「ふーん……」

去りゆくその老婆の小さな背中を目で追いながら、彩は少し感心した。

解る人には彩がただの人間ではないことに気づけるのだろう。

もっとも手を合わせたと言うことは、お稲荷さんか何かと勘違いしたのだろうか……。

彩は去りゆく老婆の関節痛と軟骨減少によって痛む左膝を治してやった。

老婆が驚いた顔をして、もうだいぶ離れた彩の方を振り返ったので、彩はにっこり笑って手を

振った。すると老婆は再び手を合わせると、深く深くお辞儀をした。

ほどなくしてバスがやってくる。

乗ったら乗ったで今度は老人たちからアイドル扱いである。こんなべっぴんさんが一人で来るのは珍しいだの、どこから来ただの、温泉には入ったかだの、美味いからこれ食ってみろだの。

ここにいる誰よりも年寄りだけねとか思いつつ、彩は一人一人に丁寧ていねいに対応した。ここでも

彩の正体とまでは言わないまでも、バスから降りるときに拝んでいくお年寄りがいた。

彼らはどうやって彩の神性に気付くのだろうか……と、彩自身も不思議に思った。もちろんこんなことは今に始まったことではないのだが、人には元から神を感じる能力があるのかもしれないと思った。

かつては神とともに生きてきたのだから、きつと遺伝子か何かに刻み込まれているのだろう。なんだかんだで終点の長野原草津口ながののはらくさつぐちにつくまでに、彩はお腹いっぱいになってしまった。

「朝食、食べてくるんじゃないか……」

まだ右手にはほくほくのサツマイモ、左手に焼き饅頭が残っている。だいたいなぜ老人は食い物をいつも持ち歩いているのか？ これは昔からの謎である。

「ごめん、食べきれなかったから運転手さんも手伝って……」

そう言って運賃と一緒に焼き饅頭も差し出してバスを降りた。

やっと町らしいところに戻ってきた。

まだまだ山に囲まれた地域ではあるが、車はひっきりなしに通るし、歩いている人も目にとまる。しかし町役場はここにはない。ここからさらに電車に乗るのだ。しかし、一〇時三〇分に駅に着いたのだが、次に来る電車は一一時二四分であった。

「えー……」

今度は一時間近く待たなければならぬ。

いやそれはいい。別に急いだことではないのだから。問題なのは……

「お腹がいっぱいってことなのよねえ……」

どっかの店に入って時間をつぶすほどの腹の余裕はない。いや、神様だからすぐにお腹を空かせることは出来るのだが、老人達からいただいたものはお供え物と同じである。ちゃんと消化してやろうじゃないの、とか思った。

もちろんあのバスに居合わせた人みんなには何らかのご利益を授けておいた。持病がある人、嫁姑問題で悩んでる人、配偶者に先立たれて寂しい思いをしている人、遺産や土地で揉めてる人、素直になれずに家族につらく当たってしまった人……明るく振る舞ってるように見えても悩みの一つや二つは抱えているものである。

ただやり過ぎはよくない。ここは彩が管理する土地ではないのだから。お供え物をいただいたささやかなお礼。それくらいに留めておくのがよい。

「えーと……」

電車がダメならタクシーか……と思いい、財布の中身を確かめる。

「ひーふーみー……」

と、数えていると目の前をタクシーが通り過ぎたので、慌てて手を上げた。

「あ———!!!タクシー!!待って!!!」

一見、クールなOLっぽく見える女が突然大声でタクシーを呼ぶものだから、自ずと注目されてしまうというものである。

彩は走ろうとするが、ドライバーは気付いたらしく、五〇メートルほど先で止まってくれた。「たすかったわー。中之条町役場までお願い」

けらけら笑いながら乗り込むと、行き先を告げる。

車内は暖かかった。

「ふう……」

流れ行く車窓を眺めながら彩は一息ついた。

タクシーから見る景色は彩にとっては新鮮だった。かつてならば賢者でしか体験することのできない速度である。それを今や人間は賢者にならずとも手に入れたのだ。

見渡せば、こんな田舎なのに家はたくさん建っている。山にへばりついて建っている家も。谷や川は橋が掛けられ、通行の邪魔になる山にはトンネルが掘られている。

この地球上のほぼ全てに人間がいると言っても、過言ではないだろう。もはや妖怪の居場所はないのだなと、彩は改めて感じた。

「観光ですか？」

ふと運転士が話しかけてきた。

「観光で町役場なんか行く？」

「わたしもそうは思っただんですがね？でも地元の人には見えないし、あ、でもあれですか、I
ターンってヤツですか？」

「それ、もう死語じゃない？」

「でも最近増えてるんですよ、若い人でも田舎に移住してくる人が」

「あらそう、それはいいことね」

「そうなんですよ、やっぱり若い人がいないと町が死んじやいますからねえ」

「そう？今の老人はみんなパワフルじゃない。感心するわ」

「そりゃあね、日本の成長を支えてきたって言う自負はあるんじゃないですかねえ。でも歳には勝てませんよ」

七〇そこそこに見えるタクシードライバーは、まだまだ元気そうだった。

ただ老人ばかりになってしまった田舎にこそ、妖怪の居場所はあるのかも……とも思い直した。

* * *

午後四時、山に囲まれた日之出村はもうかなり暗くなっていた。

ようやく彩は村に戻ってくると、なんとも言えないやるせなさに脱力していた。

たかが町役場に行つて帰つてくるだけで一日仕事という田舎の交通事情であった。

「おかえりなさい」

紗雪が出迎える。

「あー、もうただの無駄骨だったわー」

彩は服を脱ぎ散らかすと、室内着に着替えた。

「無駄骨？」

その衣服を紗雪が拾って丁寧にたたむ。

「天音の住民票がなかったのよ。あの子、こっちに越してきても住民票移してなかったのね」

「……」

住民票が妖怪である紗雪には解らない。

「あの子ってここに来る前、どこに住んでたんだっけ？」

「……」

だが紗雪は神妙な表情で黙っているだけだった。

「……あなたに聞いたあたしがバカだったわ」

確かに紗雪が知るわけがない。

「親戚に預けられてたんだっけ？　なんか若造から聞いたような気がするんだけど……あーもう

思い出せない！」

「若先生に聞けないの？」

「んー……」

若先生というのはかつてこの村にいた町医者であり、彩のお目付役のことである。悪の限りを

尽くした彩を更正させるべく、彩をこの村の土地神にして村人のために尽くすようにと命じた。

「あんまり話したくない」

「どうして？」

「だって会うといろいろお説教するんだもん、アイツ」

彩は子供みたいにぶくーっとほっぺを膨らます。

「……………」

それはお説教されるようなことをしているからでは？ と紗雪は素直に思った。正解である。

「でも……陸も知らないだろうし……夕奈は当然知らないし……あ！ 別荘に何かあるかもしれないわね！」

そうと気付くとせっかく紗雪がたんだ服をまた着て、社務所を飛び出していった。

「あの……晩御飯は……」

慌てて紗雪が消えようとする彩に声をかける。

「ついでに陸にご馳走になるわ」

という言葉を残して、彩は消えてしまった。そして陸の別荘の玄関にテレポータアウトするはずかずかと中に踏み入った。

「陸、邪魔するわよ！」

「わ、彩せんせ……！？」

「あ、彩せんせい、こんばんはー」

二人は食堂で燭台を磨いていたところだったらしく、突然現れた彩に少し驚いた様子だった。ちよっと天音の部屋を改めさせて貰うわよ。

「え、なに？」

家主の返事も聞かずに彩は階段を駆け上がって天音の部屋に入る。部屋には鍵がかかっていたが、そんなのは彩にとって障害にもなにもならない。

もちろん部屋には誰もいない。天音が使っていたその時のままだ。

ベッドに衣装棚に洋風の鏡台。同じく古いデスク。思ったより本が少ないがそれは確か別の部屋にあるんだったか……まあそっちはどうせ魔道書しかないだろうなどと思いつつ机の引き出しを開けたりしてみる。

案外、それはすぐに見つけた。

デスクの横にかけてあったウォールポケットに手紙が差し込んであるのに目がとまったのだ。

絵がきもあれば封書もある。彩はそれらをごそつと抜き取ると差し出し人を確かめた。

すると天音と同じ冷泉性のものをいくつか見つけた。

「これだわ……!!」

彩はその中から一通だけ抜き取ると、残りを元に戻した。

一瞬、嫌な単語を目にしながら……。

「あ、彩先生、晩御飯たべていく？」

さっきとは打って変わってゆっくりと階段を降りてきた彩に、陸が笑顔で話しかけてくる。

「あー、そのつもりだったんだけど、ちょっと用事を思い出したからいいわ。ありがとね、陸」

「そっか……なんかこのところ、彩先生、忙しそうだね」

「え？」

「いつもなら紗雪が来たら暇になるのに」

冬が来るとこの土地は雪ん子の紗雪に任せられ、彩は休みに入る。だからこの時期というのは彩はそれこそ朝から晩まで酒に入り浸ってゴロゴロゴロゴロしているだけのニートに成り下がる。

毎日のように陸の料理をたかりに来たり、冬支度に忙しい妖怪たちの邪魔をしたり、とにかく暇そうに見えるのだが……。

今冬の彩は違っていた。天音が汐碕市の凜の店を手伝うようになってから、彩も頻繁に汐碕市に行くようになり、村は留守がちだった。そして天音の件が一段落ついてしばらくはいつもの彩だったのだが……。

「その方が神様らしくていいでしょ？ 妖怪たちも冬支度の邪魔もされないし」

「でも神様が忙しいってことは、村も平和じゃないのかなって思ってた……」

「あら、そんなことを気にしてたのね。大丈夫よ、村はいつも通りよ」

天音という死者を出したことを除いては、平和である。

「あ、うん、そうだよね」

「じゃあね、陸、夕奈、邪魔したわね」

「あ、はい」

「またねー、彩せんせー」

二人の声がまだ消えないうちに彩の姿は見えなくなっていた。

「おかえりなさい。思ったより早かった」

土間にテレポートアウトしてきた彩を紗雪が少し驚いた表情で迎えた。

「紗雪、ごめん、晩御飯やっぱり作って」

「はい」

紗雪は理由を聞くこともなく、土間にある炊事場で調理の支度を始めた。

「ふう……」

一方の彩はコタツに座って落ち着いてからため息をつく。

持って来た葉書は天音宛に届いた絵はがきで、京都は源光庵の悟りの窓からの紅葉をとらえていた。手紙の内容は天音の体調を気遣うもので、いつでも京都に戻ってきてもよいからというようなことが添えてあった。

この文面から察するに、天音が親戚宅でのけ者にされていたというような印象は受けなかったが、慇懃無礼いんきんぶれいというか、丁寧すぎる印象は受けた。それが天音にとっては逆に居心地の悪い思い

をしたのかもしれない。

「京都か……」

考えてみれば冷泉という苗字は藤原の北家から出た歴史ある苗字である。なぜ日之出村のあるここ群馬くんだりはこの苗字があるのか彩は不思議に思ったことがあったが、なるほどどうやら京都のそれと祖は一つにするようだった。

「京都ねえ……」

彩は何度もため息をつきながら、京都という地名を口にした。

「きれいな紅葉……」

ふと膳を運んで来た紗雪が、コタツの上に置いてあった絵はがきに目をとめた。

「京都の有名な禅寺よ」

といっても彩が現役で暴れ回っていた頃には、まだなかった寺である。

「京……!!」

妖怪たちにはまだ東京よりも京都の方に憧れを持つ者が多い。

これは妖怪たちの情報ネットワークが人間たちより遙かに遅れていることを意味していた。紗雪のような比較的若い妖怪でも、京都に特別な思いを抱く。

「住民票を移してなかったのは、痛いわねえ……」

「何もしないとうなるの？」

「法的には天音はずっと生きてることになるんだけど、そうなるって死んだことがバレたときにいろいろと面倒そうね」

「ふーん」

「せっかく汐碕市の市長が怪しまれないように診断書を作ってくれたんだから出しておかないと。このまま放っておいたら、行政に変に首突っ込まれることになるし、夕奈の存在がバレたらそれはそれで凄く面倒そう……」

「あー……」

詳しくはわからないが、まーなんとなく面倒そうというのは紗雪も理解した。

「でも京都は……ふう……」

「遠い？」

「いやー……」

「？」

「あそこって、今のあたしじゃ入れないと思うのよねえ……」

「??」

「あたしが一番悪さしたと場所だから」

「そんな昔のことを憶えている人、いるの？」

「違う違う。そもそも京都全体に結界が張ってあってね……あたしみたいな物の怪が入れないよ」

うになってるのよ」

「そうなんだ？」

「今のあたしじゃ多分入れないでしょうね……現役時代ならともかく……」

彩は現在でも封印された状態のままである。尻尾はまだ九本揃っていない。

「郵送で済まされないかしら？ あ、この死亡診断書をそのままこの天音の親戚に送ればいよいよな気が……」

ただ懸念はある。

葬式はどうしたのかとか、遺体はどうしたのかとか。特に古い家系だ。形式的なものも重んじるだろう。こっちで葬式をあげるとか言い出されたら、非常に面倒くさい。なにせ遺体はもう埋めてしまったのだから。

「困ったわねえ……」

ま、でも遺体をよこせってなったら、渡せばいいかとも思った。

魂はこっちでおさえてあるし、腐りかけた遺体をキレイにするのは彩にとって難しいことではない。幸いにも診断書は昨日死んだばかりということになっているから、どうにでもなりそうだ。

「連絡は早いに越したことはないわよね」

彩はぼんと膝を打つと、紗雪に墨と硯すずりと筆、そして和紙を持って来させた。

お悔やみの言葉に、後見人である彩の簡単な自己紹介、埋葬はこれからであること、死亡診断

書をお送りするので処理を済まされますよう旨。

念のため葬式やお墓についてと、田舎過ぎるゆえ電話が通じないことも触れておいた。

墨が乾く間に夕食を摂る。

「もう今日は出せないわね……」

時間は一九時を回っていた。郵便局はもう閉まっている。

しかしこの時点で、天音の死亡届の問題は、彩の中で終わっていた。死亡診断書を天音の親戚が地元役所に出せばそれで終わるのだから。葬式や墓を用意したいというのであれば、ご遺体を渡せばよい。

「あー、おデザがほしいわ」

「柿がまだある」

「いいわねえ」

「干し柿もある」

「それもいいわねえ」

「干し芋もある」

「ステキ、全部食べるわ」

「わかった」

「あー、こういうとき神様でよかったって思うわ」

「どうして？」

「いくら食べても太らないから」

「……………」

それはずるい！

と紗雪は思った。

「エネルギー収支をね、コントロールすればいいのよ。紗雪だって本当は出来るのよ？」

「できるようになったらラーメン二郎に、行く！ ヤサイマシマシニンニクチョモランマ！」

「どこで憶えてきたのよ、そんな言葉……………」

皮もまだ剥いてない柿をかじりながら彩は呆れたような顔をした。

もうすぐ一二月、まだ夜は長い。

テレビ見終わったら今度はみかん食べよう、などと彩は思いながら、天音の死亡届のことはもうすっかり記憶の隅に追いやっていた。

* * *

一週間後——。

「ご苦労様でしたー！」

カブ独特のエンジン音とともに、陸の黄色い声が冬の高い空に吸い込まれていく。夕刻、また郵便物が来たようだ。

「書留かー」

前回同様、彩宛の封書だった。しかし今度は役所が使うような事務的な封筒ではなく、ずいぶんと良い紙が使われた厚手の封筒だった。

「夕奈、彩先生に郵便物届けに行ってくるねー」

「はい」

長い階段を上って日之出神社へ。

そして案の定寝ている彩。

それを優しく起こす。

「ふあああああ……」

眠気眼で封筒を受け取る。

なんか手触りが固い。しかも表面に凸凹も感じる。箔押しかなんかしてありそうな雰囲気。

「お酒が足りないわねえ……」

しかし封筒を見る気はさっぱりなく、彩は四つん這いのまま、酒瓶のところまで行くと、一合枡にそそいで一杯。

「んんん寝起きのいっぱい！」

機嫌はいいらしい。

「確かに渡しましたよ、彩先生！」

心配になった陸が念を押す。

「わーった、わーった」

手をヘラヘラと振りながら、彩はケタケタと笑った。

「じゃ、またねー彩先生！」

陸が元気に手を振って社務所をあとにする。

「んー……」

あとに残るは静寂と、そして左手にある固い紙の感触。

なーんか……なーんかイヤな予感。

根拠はないけど。

しかしこの封筒の中身を見るのは、酔っ払った状態じゃダメそう……と思った。

「紗雪ー？」

「はい」

土間で夕食の支度をしていた紗雪が、ややゆっくりな動作でやってきた。

「夕食ってもうすぐ出来る？」

「あと三〇分くらい」

「わかったわ」

酔いを覚ますのは夕食を食べるときでいや、と彩は思った。

あと三〇分はゴロゴロしていよう。

どうもこの狐は、嫌と思ったことは後回しにするクセがあるようだ。

「差し出し人はっと……」

封書は京都からだった。まあそれは何となく想像はついていたが……。余計に見る気がなくなる。

「めんどくさくないといいな……」

とか思いながらごろごろと転がってコタツにぶつかってとまる。

それからまた反対側にごろごろと転がる。

いや、ごろごろするというのはそういう意味じゃない、とか自分に突っ込む。

「時間をかけて酔いを覚ますのもいいかも……」

彩はむくりと起き上がると、袷羽織あつせお織をかぶるように着て外に出た。

夕暮れの気温はだいぶ寒く、酔いを覚ますには強すぎるぐらいだった。

風が少しあり、杉並木を揺らす。

しかし空気は新鮮で心地よかった。

「んんんんん……!!」

眠気とともに酔いも薄れていく。

ふと、自分はいつまでこの村にいるのだろうかなんてことを思った。

陸が大人になり、夕奈と一緒にこの村から出て行くときか……などとも思う。

それは彩にとってはほんの少しの時間でしかない。

そのあとはどうするのだろうか？

自分を待ち望んでいる者たちの所へ戻るのだろうか？

しかし今や、野望も欲望も消え失せている。七〇〇年近く前、なぜあも自分は野心家で、強欲で、やりたい放題やっていたのだろうか？ あの時の自分が本来の自分であるはずなのだが……今はなぜかあまりその実感が無い。

「飼慣らされちゃったってことなのかしらねえ……」

長いこと封印され、そのあと法の者の監視を受けつけ、今でもこののんびりとした村で……。

「なーにやってんだろねえ」

言葉通り、のんびりしているんだろうが、ハテ、七〇〇年ものんびりしていいんだろうかとも思わんでもない。

「彩先生？」

参道で空を見上げていた彩に、紗雪が声をかける。

「今行くわ」

しかし焦る必要は無い。自分に時間の制限はないのだから。居間に戻ると暖かそうなビーフシチューが彩を出迎えた。

「ん、いい香り」

様々な食材が溶け込んでいる匂い。ただ、ビーフシチューとは言うものの実際に使われている肉はジビエである。

「毎年、料理の腕があがってるわね、紗雪」

「陸のおかげ」

陸から教わるのは一つ一つの料理の調理法だけではない。どうするとどうなるか、それが重要なのだという。だから同じ料理でもその日に用意された食材によって味は様々に変化させられる。また同じ食材でも季節によって味は異なる。

それをどう引き出すか、また料理によっては逆に引き出さないことも必要らしい。

「でも、調理をするのはこの村にいる間だけ」

北の国に帰ってしまうと調理をすることは無い。

「ついだって、帰っても寝てるだけでしょ」

「コク……」

春になったら北の国に帰って、永久凍土の中で眠っているだけである。

まあその永久凍土の中で、一人で料理をして一人で食ってる絵というのも面白そうではあるが。

「さていただきましょ」

彩はコタツに入ると、さっそくとけかかったジャガイモを一口頬張った。

「ん、あつたまるわ」

満足そうに目を細める。

それから思い出したように、例の封書を開封する。

封筒はとても凝ったもので、冷泉家の家紋をあしらった箔が押しあつた。字もとても美しい。問題の内容は？

丁寧な挨拶文に、天音が世話になったことのお礼、葬式はもう済まされたであろうが、もしよろしければ分骨させてほしいこと、さらに生前の話を聞きたいこと、天音を孫のように可愛がっていた当主は重病を患っているためこちらには来られないことが書かれてあつた。

「ご丁寧な親族」

「まあね」

この手紙に文句のつけようはない。

問題なのは……

「あたしに京都に来いとさ」

生前の天音の話を聞きたい。

それも気持ちはわかる。彼らからしたら、せっかく預かった子が出て行き、そしてその先で亡

なくなった。しかも死亡診断書によれば、あの事故の怪我が元だった。無理にでも引き留めておけば良かったと思っただろう。

そして封筒にはもう一枚の紙が入っていた。小切手である。

「わざわざ交通費までちゃんと入ってたわ」

「おー」

額は多めだ。

「行ってあげるべきだとは、思う」

紗雪が真剣な表情で彩にそう答えた。一四年という短すぎる人生を、少しでも多くの人に教えてあげることが、天音のためになると紗雪は感じたのだ。

「まー、それは解るんだけどねー。問題なのは京都ってことなのよね。どうやら当主はご病気で動けないようだし？」

「やっぱり入れない？」

「行ってみないとわからないわね。ただその前に……」

「？」

「京都に入る許可をあの若造から貰わないとね……」

「そんなのいるの？」

「まー、あたしやまだ封印されてる身ですから、おほほ」

* * *

丑三つ時。

彩はあまり気乗りしないまま、故郷に戻った若造こと若先生とコンタクトをとった。

彼女が若先生こと建御名方神たけみなかたのかみを若造と呼ぶのは、彼女よりも若先生の方が年下であることに由

来する。初めて出会った時、こんなポツと出のぼんぼんに何が出来るくらいに思ったのである。

それがお目付役になったのだから、当時の彩としてはたまったものではなかったらしい。

「やあ、君の方から連絡してくるのは珍しいね、どうしたんだい？」

相変わらずの飄々とした声が返ってくる。

「とりたくて取ったんじゃないわよ！」

彩はその声にめんどくさそうに応えた。

「わかったわかった」

若先生はさっさと本題を話せと言わんばかりに、彩の言い訳を軽くあしらった。

こんの！と思いつつも、それは心の中にとどめて用件を切り出す。

「京都に行かなくちゃいけない用事が出来ただけ、その許可を貰おうと思って」

あくまでも自分は行きたくないですよー、仕方なく行くんですよーっぽい言い方をしてみる。するとにこやかだった若先生の表情が急に真面目な表情になった。

それを見て彩はあー、なんかめんどくさそうなどと思う。

「事情が複雑そうだね、そっちに行くよ」

というのが早いか、若先生の姿が彩の前に出現する。

これは実際に彼が来ているわけではなく、この時空に投影されていると表現される。投影といても三次元空間上に投影しているの、実際に触ることも出来る。

こっちがOKとも言ってもないのに女の部屋に入ってくる、フツー??とか彩はドン引きする。しかし若先生はそんなことはお構いなしのようだ。

彩は自分が送った文の名用を伝え、手元にある向こうが送ってきた封書を彼に渡した。

「ふうん……ボクはあまり中央のことには詳しくなくてね……」

「んなこたあ、解ってるわよ」

「冷泉家の当主か……」

「まだあなたがあたしのお目付役なんですよ？ 京都にあなたが入れられるのか知りたいんだけど」

「警告を出すことは出来るよ」

「警告って何よ！ まるであたしが京都に復讐に行くみたいじゃない！」

「警告になっちゃうってことだよ。でも、目的を伝えれば大丈夫じゃないかな」

「……………」

「京都の結界は今でも強力だよ。宮内庁と伊勢ががんばってる。でもあそこは歴史が古いから、何から何まで閉め出すってわけにもいかないみたいなんだ」

「どういうこと？」

「古くから暮らしてる魑魅魍魎ちみもうりょうもるからね。彼らが邪悪かどうかに限らず、そこに住んでる人の守護者だったりするから、結界はそういう彼らに影響を与えないようになってるんだ」

「つまり？」

「そこで何か変なことをしない限りは、大丈夫だと思う」

「変なことねえ……」

「ただ京都は魔窟だ。まあ、それは君が一番知っているとは思うけど」

「え？」

「君に何かする気がなくても……ちよっかいを出してきそうなヤツはいるかもしれないね」

「……………」

「君が負けることはないだろうけど、なにせ京都だ。君が力を使おうとしただけで敏感に反応するだろうね」

「あたしに変なことをしようとしたって誤解されるってことか。でも、あたしが法の者に捕まっても、あんたがなんとかしてくれるんでしょ？」

「どうかなあ」

「えー!!」

「もちろん弁護や擁護はできるよ。けれど向こうが力づくで来たら、難しい。ボクらはもう国を譲った立場だからね」

出雲いずもと高千穂たかちほはいまは同一となっはいるが、勢力図としてはすっかり塗り変えられてしまった。出雲側はあまり顧みられていないようだ。

「ふむ、なるほど」

不意に若先生が何かを思いついたように、ポンと手を打った。

「なに？」

「天津神側にも君のお目付役がいれば、問題ないのかなと思ってね」

「そんなことできるわけないでしょ？ あつちはあたしを殺したくてウズウズしてるんだから」

「どうか…もちろんそういう一派がいることはボクも知っているけれど、手が出せない理由もあるからね」

「あたしに手が出せない理由？ そんなもんあるわけないでしょ!」

「忘れたのかい？ 彩はいちおう国母こくぼだったからねえ、りっぱな皇族出身者さ」

「…!!」

「殺したくても、殺せないんじゃないかな。少なくとも、今は意見が分かれているようだよ」

「……………」

「だからボクたち出雲側に彩の管理を任せているのさ。中央が持っていたら、内部で揉めると向こうも解ってるんだね」

「それじゃあ、なおさら向こうにお目付役を立てるなんて、無理じゃない？」

「ちよっと心アタリがあるんだ。首を縦に振ってくれるかは解らないけど、頼んでみるよ」

「別にあたしはあんただけでいいんだけど！これ以上お目付役が増えても困るし」

「保険みたいなものさ。それに、一人の人間のためにそこまでしようって彩が言い出すなんて、

ボクは嬉しいんだ」

「はあ!？」

「昔の君なら、そんな優しい心は持ってなかったと思うよ。成長したんだねえ……」

「うるさい！しみじみ言うな、しみじみ！」

成長なんてしていない。

自分は最初から完成されている。

「そんなに照れなくても、その気持ちはきつとどこかで報われるさ。だから君が冷泉家のために京都に行くというなら、協力は惜しまない。中央の連中に君が変わったことを知らせるよい機会にもなりそうだ」

「……………」

なんかそういう目的を設定されると、行きたくなくなるのよね、と彩は口をとがらした。別にそんなの、どうだっていいし！

命狙われてけっこうだし！

返り討ちにするし！

今はできないけど!!

「中央には話を通しておくよ。ただ、くれぐれも変な行動だけはしないでくれよ？」

「わかってるわ……別に天音の話をしに行くだけだし」

「そうか、あの彩がねえ……うんうん」

そして若先生は、しみじみと頷きながら、消えていく。

「さっさと消えろ!!」

そんな消えゆく若先生に彩は座布団を投げつけた。

座布団が薄くなった若先生に若干に抵抗されるものの、その向こう側へと落ちていく。

しかしとりあえず京都市行きは保証されたようだ。もう行く気がだいぶ削がれてしまったけど、宣言してしまったからには行くしかない。

「ったく」

彩は投げ飛ばした座布団を拾いながら、ため息をついた。

* * *

それから彩が京都駅に降り立ったのは、一二月に入ってからだった。

いったん東京に出るから、新幹線で京都駅へ。ちなみに上毛高原駅じょうもうこうげんから東京に向かったので、上越新幹線にも乗っている。

初めての新幹線である。

それぐらいではしゃぐ彼女ではないが、時速三〇〇キロメートル越えというのは妖怪でも成し遂げた者はいないだろう。

人間の叡智をまざまざと見せつけられた三時間であった。

京都駅に降りると、あらかじめ指示された場所へ向かう。巨大な吹き抜けになっているコンコースに圧倒されながらも通り過ぎ、外に出た。すると案内の通り、目の前に京都タワーがでーんと建っているの、道路を渡ってその麓まで行った所で立ち止まった。

今日の彩は黒を基調としたノーカラーコートに同じく黒のセーター、スカートは白黒の柄にもちろん黒のタイツ、靴も金の縁取りはあるものの黒でまとめられていた。

別に葬式をイメージしたわけではないが、故人の話をするわけだし、あまり派手なおかしいと考えるのコーデだった。

そしてダテではあるがメガネも。こちらは細淵のスクエア型で普段お酒飲んでヘラヘラしてい

る彩が、ちょっとだけ知的に見えた。

待っている間に少しだけ力を試してみる。あまり大きな力を使おうとすると誤解を受けるだろうから、簡単な力を使ってみようとするが全て不発に終わった。結果が張られている感じはあまりしないのだが、彩の力は何も発揮することは出来なかった。

ここにいる限り、ただの人間と変わらないようだ。

それならば姿が元に戻ってしまうのではないかと思ったが、その辺りの仕掛けはよく解らなかつた。

これは彩にとっては丸裸にされているも同然だった。だから不安がないといえば嘘になる。もし、天津の神々が心変わりをして彩を始末しようとしたら、簡単にできてしまうだろう。

だがそれはあの若造を信じるしかなかった。しかも今回は京都に悪さをするために来たわけではない。若くして命を亡くした者の遺族のために来たのである。

そんなことを思いながら待っていると、一台の車が近づいて、彩の前で止まった。

助手席から利発そうな男が降りてきて、丁寧に挨拶をする。清潔そうなのはつらつとした男性だった。歳の程は三〇代前半だろうか？

「ようこそ京都へ」

彼はにこやかに笑うと、後部座席へと彩を案内した。

あらいい男、などと思いつつも彩は後部座席へと乗り込む。

するとすぐさま、車は滑るように走りだした。

とはいえ京都の道路は慢性的に自動車は多く、進みは悪かった。ずっと乗り物に乗りっぱなしだった彩はウンザリするかと思っただが、新幹線に較べてこの車は静かで揺れも少なく、ホツとした。

「申し遅れました、交差点だったものでしたから挨拶する時間も無く……」

助手席に座っていた男が名刺をよこしてきた。

そこには冷泉為昭と書かれてあった。嫡男であろうか？

「まずは京都を御案内しましょう。この街はあなたにとっても懐かしい場所でしょうから、行きたい所があれば何なりと御案内しますよ。もちろん、私に任せてくださってもかまいません」

彼はとても話し上手だった。

しゃべりすぎるでも無い、かといって沈黙する時間をつくるでもない。ほどよいタイミングで彩に京都を案内した。また今日のタイムスケジュールも説明された。日の明るいうちは京都観光、夜一九時に夕食を兼ねた冷泉家との懇親会、そして夜はリッツカールトンホテルのスイートに泊まって、疲れを癒やして欲しいとのことだった。

至れり尽くせりの接待である。

彩はすぐに舞い上がってしまった。

この京都には彩が暴れ回っていた一三〇〇年代以前からあるものが今でもたくさん残っている。

懐かしむにはほど遠い時間が経過しているが、しかし当時を偲ぶには充分だった。

最後に京都御所で日暮れとなった。

とはいえ京都御所は室町時代以降の内裏であり、彩が過ぎたそれとは違っていた。しかしその建築様式は、十分に懐かしむことができる建物で、彩は何もしやべらなかつたが、目を細めて当時の京都を思い出していた。

京都御所をあとにして車に乗り込むと、案内役の男が「まだ他に見たいところはありますか?」と尋ねてきた。このあとは懇親会ではないのかと首をかしげると、彼は彩がまだ見たい所があるなら、そちらを優先すると答えた。

どう言うつもりなのかは解らなかつたが、余り遅くなっても自分が疲れるだけだと思い、タイムテーブルに従うことを希望した。

「そう、ですか……」

彩の答を聞いて、彼は少しトーンを落とした。

それから車は滑るように走りだし、冷泉家の屋敷へと向かった。

流れる車窓をぼーっと眺める。今通っている場所が、かつての京都のどこなのかサッパリ解らなかつた。ただ紅葉の時期に来て見たかつたな、などと思う。

「つきましたよ」

白い壁がしばらく続いたかと思うと、立派な薬医門の前で、車は止まった。

門は開放されており、竹林に挟まれた一本の道が奥へと続いていった。さすが鎌倉時代から続く名家。大きな敷地を持っているようだった。

車を降りて案内されるままに竹林を抜け、屋敷内へ。

コートを預け、用意された大広間へと通された。そこにはすでに一族とでもいうのだろうか、一五〇六人が集まっていた。膳の用意も調っている。

そして一番奥で車椅子に座っている老人が、当主のようだ。

彩は一人一人に挨拶して、当主の隣りに座った。

当主はとても丁寧な人で、語りも柔らかく、優しい目をした人だった。歳は八〇を超えているという。

反対側の隣には、彩よりは年上に見える女性が控えていた。車椅子を押したり、当主の食事のサポートをしたりしているところを見ると、当主の面倒を見ているようだった。

ピシツとしたスーツを身に纏いタイトスカートをはいた、いかにも出来る女というような印象を受けた。

それからはなごやかな雰囲気、会は進んでいった。

彩は食事をいただきながら、生前の天音の話を主に当主に話して聞かせた。気をつけなければならぬのは、陸のことに触れないようにすることである。また基本的に天音が陰キヤなので語ることを探すのも難しかった……。

しかし何よりも彩を苦しめたのは、酒である。この懇親会は酒の席でもあった。そして様々な高級なお酒が用意されているのである。

彩としてはここにある酒全部をぐびぐび行きたい。だがそんなことをしたら、品性を疑われるというか、ヒソヒソされるのは必至。仕方がないので、気になるお酒を指名してはちびりちびり飲んでいるのだが……ああ、もどかしい……。

残ったら持ち帰りできないかなーとか、そんなことを考える。

持ち帰りできたら、リッツカールトンのスイートルームで……高級なお酒を……じゅるる、朝まで飲み明かすのに……。

はっ、いかんいかん。

彩は頬をべしべしと叩いて、緩んだ口元と頬を質した。

* * *

懇親会は二二時にもなると、お開きになった。

あっさりとしたものだった。

当主がもう少しお話をという中、親族の人たちは一人、また一人と帰っていく。

最後に当主とその世話役の女が残ったが、その女がさすがに引き留めるのは不味いと当主に

言ったところで、本当のお開きとなった。

車を用意するから、少しここで待っているように言い残し、当主と女は大広間を出て行った。

あんなに騒がしかった大広間が、いつの間にか自分一人になり、静けさに包まれた。

ほろ酔い気分だった彩は、まだ残っているお酒を飲んだりして、車の準備ができるのを待った。少しは天音の弔いになったのかしら、と思いつつ、当主も満足しておられたようだし、とりあ

えず今回の京都市行きは使命を果たせたのかななどと思う。

せっかく京都に来たのだから、陸や紗雪にお土産も買っていこう。どんなお土産がいいかしら、なんてことも思う。

やはり八つ橋か。

漬物も捨てがたい。

等と考えながら、またぐびーっとお酒を飲む。

しかし飲み過ぎてはいけない。今は神の身体ではなくただの人間なのだから、酔いすぎると覚ますのが大変になる。

「んゝゝゝ……これくらいでやめとこ」

彩は渋々ではあるが、おちよこを膳に戻した。

ふと時計を見る。時間は二二時三〇分を回っていた。

車の準備というのはそんなにかかるものなのだろうか？

だがこの時点ではまだ彩は上機嫌だったため、この状況を疑うことはしなかった。

「まだかかるのかなー、だったらもうちよっとお酒飲んじやおうかなあ……」
なんてことを考える。

「おちよこに一杯なら、酔い加減も変わらないわよね」

とか言いながら、一杯。

おいしー。

「なんだか眠くなってきた」

スイートルームのベッドはさぞかし寝心地が良いに違いないなどと思いつつ、時計を見た。

二三時になろうとしている。

冷泉家ともあろう由緒ある家が客人をここまで放置しておくものだろうか？

何となく不安感も出てきたが、そうだとイレに行こうと皆が出て行ったところと同じ魅を開けようとしたが、開かない。

「ん？」

立て付けが悪いのかと思って力を込めて開けようとするのだが、びくともしない。

「……………」

他の魅を開けようとするが、どこもぴっちり閉まっけて全く動く気配がない。

「えーと？」

こりゃあ、毘にかかったのかな？

などと思うのだが、そうなたら一大事である。

なぜなら、そうだとしたら答は一つしか無いからだ。それは死以外に思い当たることはない。

一瞬で酔いが醒める。

いやいや、待て待て、勘違いだろう。冷泉家に賢者がいたことは過去にはあったが、今は知らない。普通の人間が自分の正体を知るわけでもないはずだ。

となると……。

中央が若造の申し出を反故にしたのか……。

考えられることはそれしかなかった。朝敵を排除するよい機会だと判断したのでだろう。

だがそもそも自分が生かされているのは、天津神側の判断であつたはずだ。天津神側では意見が分かれるから、管理は国津神に移っているだけで……。

とはいえそれは何百年も前に下されたもの、気変わりしていてもおかしくはない。

中央が気変わりしたのだとしたら、もう、助かる見込みはない。

ここで殺されて、終わる。

尻尾が九本戻っていたら彩にも勝ち目はある。京都の結界など、恐るるにたりぬ。しかし封印された状態とあつては、いまここで出来ることなど……。

「残念ですが、ここからは二度と、生きて出られることはありませんよ」

不意に後ろから女の声が出た。

彩は慌てて振り返る。

するといつの間にか、あの当主の世話をしていた女が立っていた。その後ろには数人の男が。先ほど宴にいた冷泉家の親戚連中のようなのだ。

「何者だ……？」

彩はその女の顔をにらみ返したが、その顔に見覚えはなかった。

後ろに控える男達にも、賢者らしき人間はいないように見えた。ただ気になったのが、京都を案内してくれたあの男の姿はなかった。

「まさかこんな簡単に引つかかってくれるとは思いませんでしたけどね」

女が顎で合図を送ると後ろの男衆が彩にゆっくりと近づく。

抵抗した方がいいのだろうかと思う。いや、もちろん抵抗できるならしたいが……この大広間の中で逃げ回っても、男に力で勝てるわけがないのは目に見えている。体術は人よりは出来るかもしれないが……。

と思いつながら、試しに一人、二人を避けて三人目を扱かしたところで、向こうを本気にさせてしまったようだ。

五人かがりて簡単に力でねじ伏せられてしまった。両腕をがっちり捕まれて、そのまま畳の上に跪かされる。

まあ、そんなもんか、と、死ぬのに妙に冷静な自分にかえって驚く。

七〇〇年前の自分ならどうしただろうか？

泣き、わめき、命乞いでもしただろうか？

「抵抗は無駄と理解したようですね」

「……………」

一瞬、女に対して罵声を浴びせそうになったが、ぐっと堪えた。ここでなにを言おうが、状況は打開できない。

七〇〇年前に較べて確かに自分は変わったようだ。

「少し困惑しているようね」

女が立て膝をついて、彩の視線に合わせると、哀れむような目で彩を見た。

人間に同情されるほど、嫌いなことはない。

「まあね」

特に返す言葉もなかった彩は、素直に認めた。

「ご安心を、死ぬ前に最高の幸福感を味わわせてあげますから」

女はそう言って彩の右袖をまくった。

白く、ムラのないキレイな肌が露出する。

「？」

なにをする気だと思った瞬間、女が注射器を取り出したので、彩は目を見開いた。

「や、やめ……」

と叫ぼうとしたところで男に口を塞がれる。

何を打たれるのかは解らないが、薬物は意思に反して反応が起こるので、絶対拒否しなければ
と思い身体をよじらせる。しかし大人五人に羽交い締めにされているため、どうしようもない。

女は静脈を探り当てると、手際よく針を差し込んでブランジャーを押し。

まてまて、それは致死量ではないのか。

青ざめる彩。しかしそんなことを考えている場合ではなかった。一瞬で心拍数が上がるのを感じた。同時に起こる寒気のような感覚……そして不思議な脱力感。

「フフ、幸福のまま死ぬますよ」

ちげーよ、ばか、量が多すぎるんだよ……!!

とおもうとするが、そもそも呂律も回らないし、身体に力が入らないって言うか、どこに力が入っているのかも解らない。

血液が身体中を這い回る感覚がして、身体中の神経という神経が敏感になる。同時に襲ってくる眩暈めまいのような頭の中がグルグルと回るような感覚。

「御館みやかたさま、準備ができました。」

女が後ろを振り返ると、魅が開き、仁王立ちしている当主が姿を表した。

コイツ、立てなかったんじゃとか思う以前に、そもそも裸だし、アソコも勃ってるし。なんだなんだ??

頭痛がガンガンする中で、彩はまったく状況が掴めなかった。

そもそもコイツ八〇歳をとくに過ぎてるとか言ってたような。

それで勃ってるとか、何なの？ 化け物なの??

男衆が彩を開放するが、立ち上がることにすら出来なかった。そのまま前に頭から倒れる。ぐわんぐわん目が回っている。

立ち上がるうとしても平衡感覚が完全に失われて視界も回っているような状況になってきた。

「しぎゃふふへ……!!」

近づくなど言いたかったのに、全然言葉になってない。

「ククク、いいザマじゃ……」

当主がゆっくりと彩に近づくと、薄気味悪い笑みを浮かべた。

肩に触れ、それから頬を撫でられる。

「ふっ……ひゃぐっ……!!」

その瞬間、人間の姿が解かれて、耳と尻尾が露わになった。同時に撫でられただけなのに、エクスタシーに達してしまった。

ぶるると震えたかと思うと、身体をこわばらせる。

「妖怪のくせに、カワイイ仕草をしよる」

当主は倒れている彩の首筋に手をまわして、優しく首やうなじをなで回した。

「ひゃ……ひゃめっ……」

ダメだ、言葉にならない。

そもそも思考もどんどん曖昧になっていく……。

クソ、こんなところで……!!

彩は自分の甘さを呪った。

まんまと乗せられてしまったのだ。

ついに当主が彩に覆い被さり、彩を脱がしにかかる。

さすがにこれ以上はイヤだと彩は暴れるが、そもそも天地が解っていないし、自分の身体に触れているはずの当主がどこにいるかも頭の中で理解出来ていなかった。だから振り払おうとする手は空をかくだけ、よじる身体はその場でもがくだけ。

何の抵抗にもなっていないかった。

「まてまて、そう暴れたのでは、できんではないか」

「お任せください」

女はそう言うともう一本注射器を取り出した。同時に男衆が彩の腕をガッチリとホールドする。

「!!」

ばっ！ それ以上打ったら……本当に死ぬ……死ぬ……!!

彩は必死にそれを訴えようとするが、言葉にも出来ず、暴れることも出来ず、ただただ針が自分の皮膚の中に埋没していくのを見ているしかなかった。

一生懸命代謝系の能力を最大限に働かせようとするが、まったく動かない。

そのうち感覚の区別がなくなり、全ての脳への情報は、快感に変わってしまった。

もう何も思考することは出来ない。

こうなってしまうと、伝説の妖怪も、ただの人形と変わることはなかった。

仰向けに寝かされ、両腕を押さえつけられると、彩はほとんど動かなくなった。

当主が彩のスカートを破るように剥ぎ取ると、すでに尻尾によって破れていたタイツも乱暴に

破り捨て、下着に手を伸ばす。

「ん？」

下着がほかほかと暖かく湿っていた。

「ほほう……」

失禁していたのだ。

だがそれを恥ずかしいと思う感覚すら、もう彩にはなかった。いつ失禁したかも自覚がなかったかもしれない。

そしてすでにヴァギナからはしとどに愛液があふれ出ていた。

「準備もばっちりのようだのう、ふおふお」

当主は下卑た笑みを浮かべながら、彩の股間に顔を押し当て、愛液をむさぼり吸った。下品な音が大広間にこだまする。

そのたび、彩の身体がガタガタと震えた。

ちよつと触っただけでも、絶頂を迎えているようだった。

しかし表情にも、声にもそれは現れない。

ただ身体だけが激しく反応する。

「触れただけでこんなでは、入れてしまったらどうなるかのう……」

当主は愛液を口から垂らしながら上半身を起こすと、ゆっくりといきり立ったペニスを彩の股間に押し当てた。

じゅくじゅくと愛液にまみれ、ほてった彩の秘部。

「うぬの力、いたたくぞ……!!」

当主はそういうと彩に挿入した。

同時に彩の身体他弓なりに仰け反るが、それを男衆がおさえる。

「ぐお……うお……なんという締め付け……まるで処女のようにじやわい」

当主が感動する。

実際、彩の身体は処女とほぼ変わらない。歳を取ることもなく、常に新しい身体でいられるの

だから当然である。

「ああ、幸せじゃ……この身体を抱ける日が来ようとは……これで……これでワシは蘇るのじゃ……永遠の命を手に入れるのじゃ」

当主もまるで薬に犯されたかのように、一心不乱に腰を突き動かす。

その一突きごとに彩は絶頂に達するのだから、もはや彼女の脳内は正常でいられるはずがなかった。白目を剥いて泡を吹いている。しかしがちりと男性器を締め付けてくるのだから、脳の機能というのは無慈悲である。

男性器が動いたたびに、びゅーびゅーと潮を吹き、愛液をだらだらと垂れ流すのだから、男からして見れば、自分の性戯がいかに上手いかと誤解してしまうだろう。

ひとしきり彩の身体を堪能した当主はそのまま彩の子宮に溢れんばかりの精液を射精した。

それでも収まり切らず、何度も何度も彩の中で果てた。

その頃には、彩の身体はピクリとも動かなくなった。

もはや神経そのものが反応しなくなったのか、それとも情報過多で脳がパンクしてしまったのか……しかし刺激すると確実に膣は男性器を締めにかかる。死んでいるわけではなさそうだった。

「お主らも、この妖怪から命を貰うとよい。我が冷泉家のために」
当主は満足したのか、男性器を引く抜くと男衆を手招きした。

今度は男衆が、順番に彩を侵し始めた。

我慢が出来ないのか、彩を持ち上げ、肛門にもペニスを突き立てる。
こうして三日三晩、彩は犯され続けた。

* * *

彩が意識を取り戻した、いやとりあえず目を開いたのは、怒濤のレイプがおわってから丸一日が経った頃だった。

最初、目を覚まして入ってくる景色がどこかも解らなかった。

上半身を起こすと、すごい頭痛がする。

倦怠感と脱力感。

混濁した意識。

耳の奥で聞こえてくる知らない男達の声。

しかし、次第に脳が状況を整理し始め、自分がここにいる経緯を構築していく。とはいえそれが正しい記憶なのかどうかは自信がなかった。

ふらふらとしながらも、立ち上がる。

が、立ち上がれない。

なんとか床に倒れてから、ようやく這って壁にもたれかかりながら立ち上がった。

何か股下からどろりと垂れ流れてきて、着せられていた白無地をはぐと、秘部から精液が流れてきていた。

同時に強い吐き気が襲ってきて、その場で嘔吐してしまう。

黄色い胃液と共に大量の精液が出てくるが、これが何なのか彩は認識はできなかった。

なにかとても良くないことがこの身に起こった……ということは感じるのだが……。

眩暈と頭痛がひどくなって、後ろへ倒れ込む。

しかし氣を失っても幻聴は消えない。あの当主と男衆達の下品な言葉や快感に酔いしれる声が、彩の頭の中でなんども繰り返される。まるで今も続いているかのように。

また目を覚まして、今度は仰向けに寝たまま、手を上げて自分の手がちゃんと動くか確認する。若干の震えは残っているが、なんとか身体は正常に戻りつつあるようだ。

アンフェタミンかメタンフェタミンか解らないが、致死量近く打ち込まれた割にはよくぞ無事だったなどと思う。妖怪であったのが多少は関係があるのかもしれないし、脳に耐性がつきやすいのが幸いしたのかもしれない。

「うゝあゝ……」

適当に声も上げてみる。

なんかちよつとガラガラ声気味だが、とりあえず意図した言葉は発せそうだった。

っていうか、とりあえず生きてる。

あのまま殺されるのかと思ったが……。

しかし……。

「チッ……」

相変わらず力は使えないままだ。

もう立ち上がる気もない彩は、大の字に寝たまま天井をぼけーっと見つめていた。

すると、スーッと麩が静かに開く音が彩の足許の方からしてきた。

ゆっくりと上半身を起こす。

「痛ッ……」

途中で頭痛がして、起こす動作が鈍る。

視界に入ってきたのは、当主とその車椅子を押している女、そして男衆ども。自分をレイプし

続けた連中だ。

さらにもう一人、刀を差した人間が一番最後に入ってきた。

よく見ると大広間には大きな神棚のようなものがしつらえてあり、そこには御神酒とお供え物、

さらに祓い串に銅鏡がおかれてあった。天照大神と書かれた掛け軸も飾られている。

自分の首を捧げるつもりか……。

彩はこれから起きることを、すぐに理解した。

男衆が近寄ってくると、彩の両腕を捕まえ、そのまま組み伏せられた。

「己の死姿を見なくても済むようには、してあげましょう」

そして女が彩の後ろに立つと、さらしのような布で彩に目隠しをした。奪われた視界の向こうから、女の声が無常にも聞こえてくる。

「っ!!」

そして何かの台に自分の顎あごが乗せられるのがわかった。だが、目隠しされたとき、目の前にある伊勢の神棚に飾ってあった銅鏡に映る自分の姿を、彩は見逃さなかった。

目隠しをされたあとでも、頭の中にその自分の姿をハッキリと刻みつけることができたのだ。

注目すべきはその尻尾の数であった。

「一、二、三、四、五、六……七、八、九!!」

彩がその鏡に映った自分の尻尾の数を数えるのと。

「御免つかまつる!」

介錯人が打ち刀を振り下ろすのは、ほぼ同時だった。

ズンツ! という、床が抜け落ちたかのような重い振動が起きた。と同時に畳の上に鮮血を散らせながら転がったのは、彩の首ではなく、刀をしっかりと握った、介錯人の両腕だった。

次に介錯人の頭が握りつぶされ、脳漿と脳とそして血液がはじき飛ぶ。

彩が握りつぶしたのだ。

彩を押さえ込んでいた男衆は、最初の振動の時に上半身と下半身に真っ二つに切り裂かれて絶

命していた。上半身からは内臓が流れ出している。

「ひいいい……ぐぼ!!」

女が悲鳴を上げたが、途中で肺が破裂して血液が気管に流れ込んだため、声が途切れた。

乳房が胸ごと剥ぎ取られ、肋骨が剥き出しになっていたが、まだ彼女は生きている。

彩はその女の首に指を突っ込むと頸動脈をひっぱりだしてそれを女に見せた。

女は恐怖で目が見開き、口がパクパクしている。

ニタアツと笑うと、彩は容赦なくその頸動脈を引きちぎった。

鮮血が天井にまで吹き上がり、女は血しぶきをあらゆる方向にまき散らしながら倒れていった。

残りは当主である。

恐れおののき、車椅子から転げ落ちながら畳の上を這って逃げようとしているところを蹴り飛

ばし、腹を裂いて内臓を引きずり出すと、自分をさんざん犯した陰茎と睾丸を足で踏み潰した。

「苦しんで死ぬね!!」

彩は吐き捨てるようにそう言うと、当主の頭を蹴っ飛ばした。首の骨が折れ、当主の身体が内臓を四散させながら、ゴロゴロと転がっていく。

全ては一瞬の出来事であった。

残ったのは、血と脂肪と排泄物の匂い。

部屋は肉片と内臓と血が飛び散り、阿鼻叫喚の地獄絵図と化していた。

彩は他に生きている者がいないことがわかると、神棚に供えてあった日本酒を手に取り、一合枴に荒々しく注いだ。

足許に落ちていた誰かの内臓をジャポンと盛り付ける。

「へっ！」

彩はそれを内蔵ごと一気に飲み干した。

うまい！

やはり人間はうまい。

これだから妖怪はやめられない。

量に滴る血を指でなぞって、それを舐める。

「ん？」

甘酸っぱい、格別な血の味。

「んふっ！ おほほほほほほ！！！」

彩は嬉しそうに笑うと、肋骨を剥き出しに倒れている女のところに飛んで行って、ガツガツとその肉を味わった。

その女は、処女だったのだ。

処女を喰らうなど、もう一生ないと思っていた。

「あー、でもやっぱ歳食ってんのがよくないわー」

内臓とカルビとハラミを食い終えた彩は、胆汁をぺっと吐き出して、女の死体を足蹴にした。「酒!!」

彩はまた御神酒の場所に戻って一合杓になみなみと日本酒を注ぐと、ぐきゅーっと一気に飲み干す。

周囲の惨劇を見て、そういやあ夜這いに来た公家をおいしくいただいたこともあったなあなどと思いつ出した。

ほどなくして、外の廊下であろうか、それをゆっくりと歩いてくる音が聞こえた。しかし彩は隠れもせず、広間のご真ん中で酒をかつくらった。

静かにふすまが開けられる音。

そのあとに続くのは叫び声か、それとも恐れおののく慌て声か……と思いつながら彩は睨んだ。「派手にやったのう……」

しかしそこに立っていたのは、子供であった。

金色の長い髪に派手なドレスを着たお姫様のような女の子。だがその目は子供のそれではなかった。全てを見通すかのような、不敵な表情をたたえまっすぐ彩を見つめていた。

ルイーゼ・アンナ・フォン・ホラント、あの天音の命を奪った法の者の賢者であった。

「おまえは……!!」

驚いたのは彩の方だった。いや、驚いたのはルイーゼではない。ルイーゼの持っていた、一

振^{ふり}の裝飾が散りばめられた美しい刀だった。

彩は慌てて自分の尻尾を確認する。

ない！

八本しかない!!

と気付いた途端、びゅんっという空気を裂いたような音がしたかと思うと、彩から二本の光の矢が飛び出して、それがルイーゼの元で止まり、二振の刀になった。

「くそっ……なんであんたが！」

「間一髪じゃったのう、畜生よ」

ルイーゼはそういうと、不敵な笑みを浮かべるのだった。

* * *

夕碕市、市長宅。

話は四日ほど前に遡る。それは彩が京都に到着した夜のことだ。

「お荷物が届いております、どちらにお持ちしましょうか？」

市庁舎から戻ってきたルイーゼに執事が両腕に長い木箱を抱えて出迎えた。

「書齋へ頼む。着替えたらずぐにゆく」

吹き抜けの大きなホールを通り抜け、回廊を歩きながらルイーゼは答えた。

自室でナイトドレスに着替え、冠を外すと、軽く髪を梳すいてから書齋へ向かった。化粧は……あとで落とそうなどと思いながら。

夕碕市は標高が高いため、冬は北海道の辺疆へんきょうなみの寒さを誇る。したがって建物はセントラルヒーティング方式がとられており、どこにいても暖かい。

「なんじゃこれは？」

ルイーゼのデスクに置かれた木箱は、なかなか年季の入ったものだった。長さは二メートルほど、幅は三〇センチほどか。細長い木箱である。

桐きりで出来ており、その表面のくすみ具合はすでに百年以上は経過していることを物語っていた。「開け方がわからぬ……」

ルイーゼは一通りこの木箱を眺めたあと首をかしげた。

すると部屋の扉をノックする音が響く。

「開いておる、入ってかまわんぞ」

ルイーゼがそう答えると重い扉が開く音がして、執事が釘抜きを持って入ってきた。

「こちらで開けるしかないようです」

そういつて執事は木箱の上蓋を止めている釘を、一本、また一本と抜き始めた。

その間、ルイーゼは椅子に座るとその一部始終を眺めていた。

「あけてよろしいですか？」

全ての釘を抜き終わったようだ。

「かまわん」

少し身構えて、ルイーゼがうなづく。

執事がゆっくりと木蓋を持ち上げると、中からはまばゆい光があふれ出た。と言っても、その光が見えているのはルイーゼだけである。魔法がかかっているかどうかを調べる術をあらかじめ自分にかけておいたのだ。

魔法がかかっているものならばそれは輝きとして現れる。しかもその魔力が強ければ強いほど、輝きはより明るく強烈となる。

「ほう……」

ルイーゼは目を見開いて、木箱の中をのぞき込んだ。

その中にはさらに三つの細長い木箱が収められていた。その木箱自体も魔がかかっていることは解るが、しかしこの魔の源泉はそこにあるようだった。

こちらの木箱は同じく桐で出来ていたが、まるで新品のように美しかった。封は紐で結わえているだけで、それを解けば簡単に開けることが出来た。その中に入っていたのは、刀であった。

刀……とはいっても現代のそれとは幾分か違う。装飾はきらびやかで鞘に至るまで金の装飾が施されており、めのうが散りばめられている。鍔がなく反りもほとんどない真っ直ぐな刀である。

長さは一八〇cmはあろうか。

呪われているものではなさそうだったので実際に手に持ち、そして剣身を抜いてみた。

「美しい……」

見事なできばえだとルイーゼは感心した。

他の二つも同じような刀なのだろう。

「差し出し人は……」

ここで初めて、ルイーゼは誰から送られてきたのかを確認しようとした。

送り主は同じ長野県からだった。

諏訪大社だ。

「ハテ……身に覚えはないが……」

と思いつながらも、手紙はないのかとごそごそ他の木箱も全部取り出してみるが、何もなし。

「こちらに」

執事が木蓋の裏側をルイーゼに向けて見せた。そこには折りたたんだ和紙の書状が貼ってあり、

「白面金毛九尾狐乃尾」と書いてあった。

「……………」

それをながし、広げてみる。

差し出し人は出雲側の神の一人で、内容は九尾狐つまりは彩の保護を願うものだった。

三振りの刀は九尾の残る三つの尾であること、これを自由に彩に戻したり取り上げたりすることが出来ること、そして彩が徳を積んで改心すればこの尾は全て返すことになっているという。

「ふむ、何の意図があつてこれを妾に届けたのか……?」

そもそも徳を積むとは具体的に何なのだ? 仏教用語ではないか。

イマイチ要領を得られなかったルイーゼは少しふてくされて、デスクの上に書状を放った。すると、また書斎のドアがノックされた。

「ん?」

「ルイーゼ様、ご来客です」

メイドの声だった。

なんだか今夜は忙しい日だ。

「こんな時間に……名は名乗ったのか?」

「はい、宮内庁の八木健一郎様と申してお方で……」

ドアの向こうでメイドが渡された名刺を読み上げた。

「宮内庁じゃと!」

何じゃこんな時間にと申したが、宮内庁と聞いてルイーゼは慌てて廊下に出た。

「妾が案内するから、ホールでくつろいで貰うのじゃ」

「かしこまりました」

執事はホールへ、メイドはルイーゼの着替えを手伝うために共に彼女の部屋へ。急いで執務用のドレスに着替え、髪を整えてからメインホールに向かった。化粧を落とさずによかったなどと思いつながら。

「お待たせした」

少し早足でホールに入ってきたルイーゼは礼儀正しく礼をすると、ホールのソファに座っていた二人に手を差し出した。

二人が立ち上がって、順に握手する。

「こちらこそ、突然尋ねて申しわけございません」

二人はどちらも身だしなみもしっかりした男性だった。一人は賢者だからルイーゼも知っていた。もう一人は宮内庁ではなく神社本庁の人間であった。

「急を要することでしたので、ルイーゼ様にも判断を仰ぎたく参じたいです」

応接間へ案内する間にも、一人が説明を始めた。それほどまでに切羽詰まった状況なのだろう。

「実は狐が一匹、京都で捕まったと連絡がありました……」

「狐じゃと?」

「白面金毛九尾の狐、と言えばルイーゼ様もおわかりになるかと」

「……………」

その名を聞いてルイーゼは内心焦った。

それに関するものが、まさに先ほど届いたからだ。

何じゃこのタイミングは……まるで見計らったかのように……。

「喜ばしいことではないのか？ その、妾は歴史に疎いので自信はないのじゃか、お主たちの仇敵と聞くし、妾の先祖もだいぶ手を焼いたと聞いておる」

ルイーゼは焦りを隠しながらも、応接室のソファにかけるよう二人に促した。同時にベルを鳴らして二人に紅茶を持ってくるように命じる。

「それはその通りではあるのですが、彼女に関しては出雲方から京都への入京願いが出されていたところ、逆に彼女を捕縛したので殺害したいという申し出があったのです」

「申し出をしたのは京都の盟主とも言うべき血筋の者からして……」

「ふむ、その判断をなぜ妾に？ 相談する相手は帝では……」

伝説によれば九尾の狐は鳥羽上皇の妃とされている。となると命の与奪に関しての最終決定は天皇が持つべきだとルイーゼは考えた。

「ことはとてもセンシティブな問題でして、殺すべきか生かすべきかは庁内でも意見が分かれておりまして……帝はおそらくですが、生かす方をお選びになるかと」

「では生かすのでよいではないか？」

「とはいえ討伐対象でありましたし、生かしておけばまた兇変を呼び込みかねません」

「では殺すのでよいではないか？」

「そこに大きな問題が生じてくるのです」

「？」

「彼女は国母です。妖怪と言えども皇族を殺すことになってしまふのです」

「なるほどのう、たしかにセンシティブじゃ」

「そこで判断を国際的な立場に移したいと考えたのです」

「そういうことじゃったか……」

太平洋戦争で敗戦した日本は、連合国側の支配を受けることになったが、賢者においてもその支配に準じることになった。これは宗教的な側面も絡んでおり、天皇制という国体を維持することになった以上、日本の神々も戦勝国アメリカ、すなわちキリスト教の管理下に置かれることになってしまったのである。

ホラント家は戦前どころか西暦六〇七〇年頃から日本に定着しており、カソリックであったことから、日本の賢者をまとめる立場になった。

生かすにせよ、殺すにせよ、その大義名分が日本から出たのではなく、国際的な立場から出たことにすれば、少なくとも国内では納得するだろうという目論見のようだ。

ルイーゼは九尾の狐、つまり彩を殺害することに、賛成であった。

悪の芽を摘んでおくことは法の者として最大限努力すべきことであり、これはチャンスである。

「じゃが、価値ある存在でもある」

彼女は人間たちよりも遙かに永く生きた、言葉が話せる存在である。

彼女の歴史的価値は大きい。

それに諏訪大社から送られてきた書状によれば、彼女には更生の機会が与えられているらしい。殺すに賛成が一、殺すに反対が歴史的価値と契約とで二。自分の中で多数決を取ってみたが、どうやら生かすことの方が正しいようだ。

「この者の妾の解っていることは、今の所、殺害することはまかりならんということじゃ」
少し悔しそうに、ルイーゼは殺害拒否を通過した。

それに殺すと判断した場合でも、裁判は必要である。今すぐというわけには行かない。

この時、宮内庁の賢者は少しホツとした表情を見せたが、神社本庁の人間はルイーゼと視線を合わせようとしなかった。

どうやらこの二人は生かす側と殺す側の代表ということのようだ。

両者がルイーゼからの言葉を聞きに来たわけである。

「一つだけ質問があります」

すると神社本庁の方が、落ち着いた声で手を上げた。

「なんなりと」

「もしこの者が抵抗した場合は……」

ルイーゼにとって、これは予想した質問だった。そしてそれはある意味ルイーゼにとっても好

都合だった。

「その場合は致し方あるまい。あくまでも正当防衛じゃからのう」

京都という場所において、彩が暴れ、その結果殺さざるを得なかったのであればそれは致し方ないこと。

* * *

そうしてルイーゼは彩の殺害現場にやってきたのである。

多忙な執務の時間をぬって、ようやく京都入りしたのがまさに彩が殺される日だった。

「もし出雲方がこの刀を妾によこさなかつたら……お主の殺害を承認していたかも知れぬ」

「まさしく法を守ったってこと？」

「そうじゃ、法の者である以上、お主と日本の神が交わした契約は守らねばならん」

もしあと一秒、いやもしかしたら〇・一秒でもルイーゼが彩に尻尾を返すのが遅れていたなら、畳を鮮血で染めたのは彩の首であつたかもしれない。

「ほんとに死ぬかと思つたわ」

彩はあの目隠しをされた時のことを思い出して、ギリリと下唇を噛んだ。

そしてまた日本酒の血割をぐぎゅーっと飲み干す。

「悪趣味じゃのう……これじゃから獣は好かん。片付けもせんと食い散らかしおって」

ルイーゼは軽蔑するような目で美味しそうに酒の血割りを啜る彩を見つめた。

「人間の血は格別だわ……特に絶望と恐怖と悔しさに死んでいったヤツの血は、身震いするほど美味い」

そういうと彩は血がなみなみと入った一合枘をルイーゼに差し出した。

生臭い匂いが、むわっとルイーゼの鼻を刺激する。

「いらぬ」

「フフ、まさか、あんたが持ってたとはね」

差し出した一合枘の中身を自分で一気に飲み干すと、彩は恨めしそうにルイーゼを睨んだ。

「手に入れたのは、つい最近のことじゃ」

「解ってるわ。それを持ってたのが誰だか知っていたからね」

そして彼は天津神側に目付役をつけるといっていた。

その相手が、ルイーゼだったことにも彩は納得がいった。

「よい刀じゃ。妾には扱えぬがのう」

ルイーゼは一振を鞘から抜き放つと、それを天井の明かりに透かした。剣身は美しく輝き、魔の力を溢れさせていた。これが彩の力である。

「法の者もやるわね……あたしの良心につけ込んで、こんな仕掛けをわざわざ……」

若くして死んだ天音のために。

彩は本当にそう思って、この京都に来た。

しかしその思いは、踏みにじられたのだ。

「お主を殺すなら、京都に入った段階で殺っておる。その当主とやらの遺体を、もう一度よく見てみるのじゃ」

「え？」

彩は自分が蹴っ飛ばしたあの老人の遺体に、あわてて視線を向けた。

ルイーゼがその死体に触れると、何か呪文を唱えた。するとその死体は、大きな白蛇となった。

「こいつは……」

「冷泉家に取り憑いていたそうじゃ。はじめは益をもたらす良い守り神だったらしいぞよ？しかし妖怪としての本能在が疼いたんじやろうな、冷泉家を守る代わりに生け贄を欲するようになった。生まれたばかりの長男を授けなければならなかったと聞いておる」

「なるほどね……まさかこんな格下のヤツに姦られたなんて……」

彩ががっくりとうなだれる。

「その食われた長男が白蛇となり、この冷泉家を継ぐという仕掛けじゃ。そして冷泉家はたいそう栄えた」

「ま、今でも残ってるんだものね」

「じゃがついにその呪縛から逃れるチャンスが来た。こやつが取り憑くはずだった長男を、こやつが取り憑く前に殺すことに冷泉家は成功したのじゃ。正確にはそういう演技をうって、長男は隠して育てられたそうじゃ」

「へー」

「怒り狂った白蛇は冷泉家に不幸をもたらし生け贄を要求し続けたが、長男を食わねば若返ることは出来ぬ。いよいよ当主の命も尽きかけたところへ、ちょうどお主の文が届いた、と言うわけじゃ」

力ある妖怪を喰らえば、若返ることが出来ると考えたのだろう。

「それを見抜けなかったあたしが、バカだったってことね」

「どうかのう……妾も騙されたからのう」

「は？ どういうこと？」

「そもそもお主の京都入りは宮内庁に承認されておったのじゃ。ところがお主を捕獲したので殺害したいという願いも出されてのう……何のことかと思つて来て見れば」

「冷泉家に取り憑いた妖怪が、あたしの命を欲してたつてわけね」

「そういうことじゃな」

「でもあたしを殺すことをどうしてわざわざ届け出たのかしら？ 黙っておけば、あたしを殺せたのに」

「京都の結界を維持するためにも、お主を殺すお墨付きが欲しかったのじゃろうな」

「あー」

「京都の結界がなければ、お主を押さえ込むことは出来ぬ。その確証が欲しかったのじゃろう。じゃがそれが裏目に出してしまったということじゃ」

「白蛇の運よりも、あたしの運の方が上だったってことなのかしら」

「フフ、かもしれぬ」

「ま、いいわ、処女も食えたし」

彩はどこで見つけたのか、爪楊枝を咥えると満足そうな笑みを浮かべた。

「おぞましい……とにかく、長居は無用じゃ。後始末は冷泉家の者に任せて、帰るとするぞよ」
「えー!?」

「なんじゃ?」

「リッツカールトンのスイートルーム……」

「なにを寝ぼけたことを言うておるのじゃ、お主は殺されることになっていたのじゃぞ? 部屋など予約されておるわけがなからう」

「なんですって!?」

「あんなものでまかせじゃ、ほら、帰るぞ」

ルイーゼは手に持っていた刀の柄で彩を小突くと、外へ出るように促した。

「ちよ、ちよつとお！」

去り際、送迎の時に助手席に座っていた案内役の男とすれ違った。彼は裸に白無地しかつけていなかった彩に毛皮コートをかけてくれると、深く深く頭を下げ、そして安堵の表情で去りゆく彩を見送った。

「ふ〜ん」

「どうしたのじゃ？」

屋敷の入り口で待機していた車に乗り込みながら、彩はその男の方を見た。

「アイツが保護されてた長男ってヤツ？」

「ん？」

ルイーゼも釣られて屋敷の中を見た。

彼が再び頭を下げる。

「フフ、お主に感謝しているようじゃのう」

「なるほどね」

「俵屋旅館へやってくれ」

乗り込むと運転士に予約を入れてある宿の名前を告げる。俵屋旅館は創業三〇〇年とも言われる老舗旅館だ。

「え、京都に泊まれるの？」

彩が嬉しそうな表情をする。

「お主のその血にまみれた姿をなんとかせねばなるまい。ホテルではないが、妾がよく使う旅館は手配してある。皇后こうこうであったお主を迎えるにも遜色ない宿じゃ」

「さすが、金持ちは違うわあ」

「ふん、あとで請求するから、覚悟しておくがよい」

「げっ！ アバ、アバでいいっす」

「もう遅い」

「えー!？」

泣きそうな表情をする彩を乗せて、車は静かに夜の京都に消えていった。

* * *

「あ~~~~平和だわ~~~~」

日之出村に戻ってきた彩は、拝殿の縁側に座ってひなたぼっこをしていた。

京都での出来事がまるで夢のように……。

まああんな嫌な記憶はさっさと忘れるに越したことはない。

「お茶がおいしいわ……」

「狭山茶。最近のお気に入り」

お代わりを持って来た紗雪が、ぼそりとそんなことを言う。

「あら、そうなの。っていうか紗雪がお茶のブランドを気にしてたとは、知らなかったわ」

「香り宇治、色は静岡、味狭山」

「なにそれ？」

「それくらい狭山茶は美味しい。作ってるのは入間^{いるま}だけど」

「はあ？」

「狭山茶を作っているのは、入間市」

「へー」

「と、このあいだテレビでやってた」

「テレビかい」

彩が呆れる。

「ま、でも美味しけりゃ、どうでもいいわ」

「ずーっと入れてもらったお茶を飲む。」

ほんのりと甘み。

それにポカポカの陽気。

平和である。

「彩先生」

ふと目を上げると、階段を上ってきた陸がなにかを抱えてやってくるのが見えた。

「あら、陸、どうしたの？」

「クッキー焼いたから、持って来たんだ。新作だよ」

「あら、ちょうどお茶のアテが欲しかったところよ」

陸が持って来たのは白玉のように丸くて白いクッキーだった。

「ブルドネージュっていうんだよ」

という説明をまったく聞く気もなく、彩はさっそく一つつまんで頬張る。

「……………あつま!!!」

余りの甘さに、喉がビツクリしてしまった。

「渋い紅茶が合うんだよ」

いやそれはそうかもしれないが、今日の前にあるのは緑茶だ。

「渋い御茶、いれる？」

「お願いするわ……」

かすれた声で彩が答える。

「あれー？ おいしくなかった？」

「予想の遙か上に行く甘さでビツクリしただけよ」

まだ喉に残っている砂糖を流し込もうと、紗雪が入れたばかりのお茶をごくごく飲み干す。

「えー、そんなに甘かった？　じゃあ失敗かなあ……他にも色んな味を作ったんだけど……」

確かに白以外にも薄ピンクや赤、薄い緑色、茶色などなど色んな色の丸いクッキーがあった。

味も何となく想像出来る。ピンクは桃、赤はリンゴかイチゴ、茶色はチョコレートかピーナッツクリームだろうか？　緑色は抹茶だろう。

「大丈夫よ、甘さを解って食べれば……」

彩が茶色を選んでそれを半分に割ってから食べた。

チョコレートのほろ苦と甘さが口の中で溶け合う。まぶしてある粉はココアパウダーだ。

そして渋めのお茶を一口。

「ん、幸せ」

こうやって食べれば充分に美味しい。丸ごと一口で食べようとしたのが間違いだったのである。

「よかったあ」

陸はにっこりと笑った。

あー、もうその笑顔が見られるだけで幸せだわ。

などと思う。

渾沌の世界にいたときには想像も出来ない、平和でほのぼのとした時間だ。

「じゃ、戻るね」

「ありがとうね、陸」

「ありがとう……」

「どういたしまして」

ぺこりと頭を下げて、陸は嬉しそうに参道を降りて行く。

「……ふむ」

陸の後ろ姿を見ながら、彩はふとあることに気付いた。

ルイーゼはなんと言ったか？

『じゃがついにその呪縛から逃れるチャンスが来た。こやつが取り憑くはずだった長男を、こやつが取り憑く前に殺すことに冷泉家は成功したのじゃ。正確にはそういう演技をうって、長男は隠して育てられたそうじゃ』

そして、あの白蛇が要求した生け贄は？

『冷泉家を守る代わりに、生け贄を欲するようになった。生まれたばかりの長男を授けなければならなかったと聞いておる』

「うゝん……？」

白蛇を欺き、隠して育てられたのは陸の父ではないのか？

だからこんな群馬くんだりにいたのであって……。

そして、陸は長男である。

陸とその両親は事故で死んだ。

それは白蛇の呪いではないのか？

もしくは白蛇に存在を知られて冷泉家から殺されたということもあり得る。そしてそれは白蛇の呪いの延長でもあろう。

妹である天音も一四歳で死んだ。

これも白蛇の呪いが及んでいてもおかしくなさそうだ。

どちらにせよ白蛇は隠して育てられた長男の存在を知っていたことになる。もともと天音は彩の下にいればまだ死ななくてすんだと推測できる。白蛇の呪いは日之出村に手を出せなかったはずだ。天音が汐碕市にさえ行かなければ……。

そして天音が魔術に染まったのも、冷泉家のそういった下地が関係しているのだろうと思った。「いやいや、待てよ！」

陸を復活させるってことは即ち、長男を復活させるってことでもあったってこと？

いや、まさか……さすがにそこまでの計画性は白蛇にはないはずよ。

彩は首を横に振った。

だって天音にその魔の才能を授けることが出来るなら、白蛇自身が長男を生き返らせられたはずだし、天音を呪い殺す理由もない。

疑問はもう一つある。

「あたしに京都を案内してくれた、あの男は……誰だ？」

ルイーゼの話聞いて、彩はあの男が隠して育てられた長男だと思った。しかし、それならば白蛇が生きているウチに冷泉家にいることがおかしいのではないか。

つまりあの冷泉家での出来事は、冷泉家の当主派とその対立派の争いの場でもあったのではないだろうか？ だからあの男は彩に京都観光を続けることを勧めたのだろう。あの場所に彩を招きたくはなかったのだ。

いやーなことに気付いちやったなあ……と思うが、そこで彩は思考を止めた。

この平和な村が……実はそんなに平和でもないことにも気付いてしまった。

陸を、たぶん守らなくちやいけない。

そんな気がした。なにせ冷泉家の長男が、生きているのだから。

「あーあ……」

何もかもがめんどくさくくなって、彩はごろんと後ろに寝転んだ。

「どうしたの？」

紗雪がそんな彩をのぞき込む。

「平和って、ほんと維持するのが大変って……そう思ったらすすごく疲れたのよ」

「やっぱり神様は大変？」

「こんな小さな村でもね……」

「そう……」

紗雪は実感がわかないようだった。

まだこの幼い妖怪には、解らないのかもしれない。

できればずっと解らないまま置いて欲しい。そんなことも思った。

けれど、おそらくそれは無理な話だろう。紗雪だっていつかは妖怪として成長していく。冬をもたらず力は強大だ。強大な力は、それだけで利権となる。そうなると人間と対立を生む。

この小さな村でさえ、この有様だ。

あのルーゼという小さな賢者が日本全体を任されているかと思うと……頭が下がる。

彩は素直に感心した。

今まで平和を作り出すなどということはしてこなかったから、余計にそう思うのかも知れない。渾沌でいる方が、心はすさむが、遙かに楽なのかも……。

「若造め、めんどくさいものを背負わせてくれたわね」

自分にはハンデが大きいと思った。

平和を守ったことがない者が、平和を守るのだから。

「お茶、冷えますよ」

紗雪がまだ湯飲みに残っているお茶に気付いて、ぼそりとそんなことを言った。

彩は起き上がってそれを一気飲みする。

「もう、冷えてる」

そしてそう言うと、湯飲みを紗雪に差し出した。

「じゃあ、こっちのも冷えてるかも」

紗雪は急須を持ち上げて、首を左右に振った。

「仕方ないわね……コタツにでも入って飲み直しましょうか……」

彩がのびをして、立ち上がる。

いい天気だから、家に入るのはちょっともつたいなと思いつつながら。

この村がこの青空のようにいつまでも平和であればと思いつつながら……。

「彩先生？」

すでに社務所の入り口まで来ていた紗雪が振り返って彩の名を呼ぶ。

「今行くわ」

彩は我に返ると、少し後ろ髪引かれる思いを抱きながら拝殿をあとにした。